

二つの世界都市が語る〈自然〉：

公園観光テキストの環境文体論的比較 —東京とロンドンを事例として—

寺西雅之・吉田安曇・那須雅子

1. はじめに

近年、観光地における案内板やパンフレット、ウェブサイトなどの観光テキストは、単なる情報提供の媒体ではなく、場所や文化、自然をどのように理解すべきかという「世界の見方」を提示するディスコースとして注目されている。特に都市公園は、都市生活と自然環境が交差する空間であり、そこで提示される言語表現は、人間と自然の関係をどのように位置づけるかという価値観を反映していると考えられる。

また、観光コミュニケーションの領域では、多言語化が進む中で翻訳の役割も重要になっている。観光地では、日本語原文と英語などの翻訳の間で意味が一致しないことも少なくなく、その過程で自然や文化の価値づけが微妙に変化する可能性がある。

本研究では、環境文体論 (ecostylistics) の枠組みを用いて、都市公園における観光テキストが自然をどのように語り、価値づけているのかを分析する。具体的には、東京とロンドンという二つの世界都市の公園テキストを比較し、言語表現の選択がどのような環境ストーリーを構築しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 理論的背景

本研究の理論的基盤は、環境文体論、観光コミュニケーション研究、そして翻訳研究にある。

まず、近年の外国語教育研究では、観光地の案内板やパンフレット、ウェブサイトなどの実社会で使用されているテキストを学習資源として活用することの意義が指摘されている。Gilmore (2007) は、authentic materials が社会的文脈における言語使用を反映する点で有用であり、現実に即した言語能力の育成には、教室外で用いられるテキストの分析が有効であることを示唆している。このようなテキストへの接触は、学習者の気づきを促し、学習動機の向上にも寄与する可能性がある。また、Maley (2017) や Jones (2022) は、authenticity を単にテキストの形式的特性として捉えるのではなく、学習者がそれをどのような意味ある経験として受け取るかという側面を含めて理解する必要があると指摘している。これらの議論は、観光テキストの分析が単なる言語分析にとどまらず、社会的・文化的意味の理解に関わるものであることを示している。

観光研究の文脈においても、観光地のテキストは単なる情報提供の媒体ではなく、場所や文化の価値を構築するディスコースとして機能することが指摘されている。寺西・吉田 (2024) は、姫路城の観光テキストを対象とした研究において、翻訳や文体の選択が観光者の文化理解の枠組みに影響を与える可能性を示し、観光コミュニケーションの分析において文体的視点と翻訳研究を組み合わせる必要性を指摘している。本研究は、こうした研究の延長線上に位置づけられるものであり、分析対象を都市公園の観光テキストへと拡張するものである。

さらに、本研究の中心的な理論枠組みとなるのが環境文体論 (ecostylistics) である。環境文体論は、言語が自然や環境をどのように描写し、評価し、再構築するのかを文体論的観点から分析する研究領域である。この分野は、より広い ecolinguistics の研究潮流とも密接に関連している。特に Stibbe (2015) は、社会に共有される価値観や認識の枠組みを「ストーリー」と捉え、環境ディスコースがどのような自然観を形成しているのかを分析する言語学的枠組みを提示している。さらに、ストーリーを beneficial, ambivalent, destructive の三類型に分類し、テキストの環境的含意を評価する方法を示している。

こうした議論を踏まえ、Virdis (2022) は、Stibbe の提示した環境ディスコースの分析枠組みを基盤としつつ、環境文体論の方法論を精緻化している。具体的には、環境団体のウェブサイトなどを対象に、語彙選択や評価表現、行為主体の配置といった文体的特徴を分析することで、環境ディスコースの多様な表象を示している。このようなアプローチは、自然や環境がどのような語りの枠組みの中で提示されているのかを明らかにする上で有効であり、観光テキストの分析にも応用可能であると考えられる。

本研究ではさらに、ecotranslation の視点を取り入れる。Cronin (2017) は、翻訳を単なる言語変換ではなく、環境や文化との関係の中で意味が再構築されるプロセスとして捉えており、この点は本研究において重要である。特に観光テキストの翻訳においては、語彙選択や文体の違いによって、自然と人間の関係の提示の仕方が変化する可能性がある。したがって、環境文体論と ecotranslation を組み合わせることで、観光テキストにおける自然の語りの変化をより多面的に分析することが可能になると考えられる。

3. 研究対象と方法

本研究では、ロンドンと東京の都市公園に設置された案内板と公式ウェブサイトのテキストを対象とし、語彙選択、行為主体の構造、評価表現などの文体的特徴に注目して分析を行った。ロンドンの事例としては **Regent's Park** と **Queen's Park**、東京の事例としては上野公園および新宿御苑を取り上げた。分析では、各テキストが自然をどのような存在として構築しているのかを比較し、その語りの枠組みを環境文体論の観点から検討した。

4. ロンドンの公園テキスト

Regent's Park に設置された案内板には、次のような記述が見られる。

These (i.e. the species mentioned above) and other wildlife benefit from the food and shelter provided by the park's diversity of carefully managed habitats; [...] The park's diverse habitats are home to more than 400 plant species [...] (**Regent's Park** 案内板、筆者書き起こし)

この記述から、公園の自然が主に生態系として語られていることがわかる。まず、“the food and shelter provided by the park's diversity of carefully managed habitats”という記述では、食料や避難場所が“habitats”によって提供されるものとして表現されており、結果として自然環境が生物を支える基盤として構築されている。また、“are home to more than 400 plant species”という表現に見られるように、“home”という語彙によって、公園の環境が生物の生活空間として構築されている。これらの言語的選択は、自然を人間の利用対象ではなく、生物の生活世界として提示するものであり、Stibbe (2015) のいう **beneficial ecological story** の特徴を示しているといえる。さらに、**Regent's Park** の公式ウェブサイトにおいても、“the park is home to London's only breeding population of hedgehogs”や“Wildlife thrives here”といった表現が用いられ、自然は生物が生活し、繁栄する主体的空間として語られている (**The Royal Parks**, n.d.)。 **Regent's Park** は **The Royal Parks** が管理する公園の一つであり、このことから公園の自然を生物の生息環境として語る枠組みが、**The Royal Parks** という組織の制度的な情報発信の中で用いられていることが確認できる。

次に、同じくロンドンの **Queen's Park** を取り上げる。ここでは、公園そのものの描写というよりは、公園の制度についてのテキストを分析する。**Queen's Park** に設置された“**Green Flag Award**”の看板(図1)では、自然は制度的評価の対象として提示されている。“**Green Flag Award**”とは、1996年にイギリスで始まった公園・緑地の質を評価する公式認証制度であり、高い管理水準と公共空間としての質の高さが認められた証拠となる。看板では“criteria”や“standard”といった語彙が用いられ、公園は管理や評価の枠組みの中で語られている。ここでは自然は生態系そのものというよりも、管理可能な公共資源として構築されているといえる。さらに、**Regent's Park** のテキストでは人間の存在が前景化されず、自然が主体として描かれているのに対し、**Queen's Park** の事例では評価基準や管理の枠組みが前面に出ることで人間の制度的関与が強調されている。このように、ロンドンの公園テキストにおいては、生態系中心の語りと制度的管理の語りが対照的に見られ、同じロンドンの公園であっても、その語りの枠組みの違いによって、提示される環境ストーリーは大きく異なるということが明らかになった。

5. 東京の公園テキスト

東京の事例としてまず上野公園の冬牡丹掲示を取り上げる。この掲示(図2)には「綺麗に咲いております」という短いテキストが書かれている。ここで注目されるのは、「綺麗に」という評価語である。この表現により自然は生態系としてではなく、観賞の対象として提示されている。また「咲いております」という丁寧な状態提示は、来園者に「今が見頃である」という行動の方向づけを行うディスコースとして機能している。

英語では“The flowers are blooming beautifully.”と訳されているが、この



図 1 **Queen's Park** 看板
(2025年11月筆者撮影)



図 2 上野公園の冬牡丹掲示
(2025年10月筆者撮影)

翻訳では日本語に含まれていた対人的含意が弱まり、花の状態を視覚的に描写する表現へと重心が移動している。この事例は、翻訳によって自然の提示の仕方がわずかに再構築された例といえる。

次に、新宿御苑の自然保護に関する案内板（現地掲示、筆者書き起こし）を見てみる。日本語版では、「指定されています」、「登録されています」といった制度的語彙が繰り返し用いられており、自然は制度的枠組みの中で位置づけられている。一方、英語版では、“is committed to”（～に取り組んでいる）、“is working to preserve”（保全に向けて取り組んでいる）といった表現が用いられ、保全活動を担う主体として新宿御苑が提示されている。このように、日本語では制度的枠組みが強調されるのに対し、英語ではミッション志向の語りが前面に出るという違いが見られる。

6. 比較と考察

以上の分析から、都市公園における自然は単一の形で語られているわけではなく、複数の語りの枠組みの中で構築されていることが確認された。まず、ロンドンの **Regent's Park** では自然は生物の「住まい」として語られ、**Queen's Park** では制度的評価の対象として提示されていた。一方、東京の上野公園では自然は観賞対象として語られ、新宿御苑では制度化された保全活動の対象として位置づけられていた。このように、語彙選択や行為主体の構造、翻訳の方法などの文体的特徴によって、同じ都市公園であっても異なる環境ストーリーが構築されていることが確認できる。

以上の分析から、都市公園における自然の語りは、生態系としての自然、観賞対象としての自然、制度的管理対象としての自然、ミッション志向の保全対象としての自然という複数の環境ストーリーとして整理することができる。これらは Stibbe (2015) の枠組みと照らしても、都市環境における自然観の多様性を示すものといえる。また、本研究で見られた翻訳の差異は、翻訳が単なる言語変換ではなく、自然の価値づけを再構築するプロセスであることを示している。さらに、これらの分析は、観光テキストを用いた精読や文体分析が、実社会における意味構築を捉える学習資源となり得ることを示唆している。

7. 結論

本研究の主な結論は次の三点にまとめられる。

第一に、都市公園の自然は単一の概念ではなく、生態系、観賞対象、制度的保全対象など、複数の語りの枠組みの中で構築されている。

第二に、語彙選択や行為主体の配置といった文体的選択および翻訳のプロセスによって、自然の価値づけは大きく変化する。

第三に、本研究は環境文体論、観光コミュニケーション研究、ecotranslation を統合する分析枠組みを提示しており、この三者を接続する試みは、都市観光における自然の語りを再考するための新たな方法論として位置づけることができる。

以上のように、本研究は、都市観光における自然の表象を言語的観点から再検討するとともに、持続可能な都市環境を考える上でのディスコース分析の可能性を示すものである。

参考文献

- 寺西雅之・吉田安曇 (2024) .「姫路城をめぐる観光コミュニケーションの分析—翻訳、文体、異文化理解の視点から—」 *JAILA Journal*, 10, 14–25.
- Cronin, M. (2017). *Eco-translation: Translation and ecology in the age of the Anthropocene*. Routledge.
- Gilmore, A. (2007). Authentic materials and authenticity in foreign language learning. *Language Teaching*, 40 (2), 97–118. <https://doi.org/10.1017/S0261444807004144>
- Jones, C. (2022). Authenticity in language teaching materials. In J. Norton & H. Buchanan (Eds.), *The Routledge handbook of materials development for language teaching* (pp. 65–77). Routledge.
- Maley, A. (2017). Conclusion. In A. Maley & B. Tomlinson (Eds.), *Authenticity in materials development for language learning* (pp. 260–263). Cambridge Scholars Publishing.
- The Royal Parks. (n.d.). *Regent's Park and Primrose Hill*. <https://www.royalparks.org.uk/visit/parks/regents-park-primrose-hill>
- Stibbe, A. (2015). *Ecolinguistics: Language, ecology and the stories we live by*. Routledge.
- Virdis, D. F. (2022). *Ecological stylistics: Ecostylistic approaches to discourses of nature, the environment and sustainability*. Palgrave Macmillan.